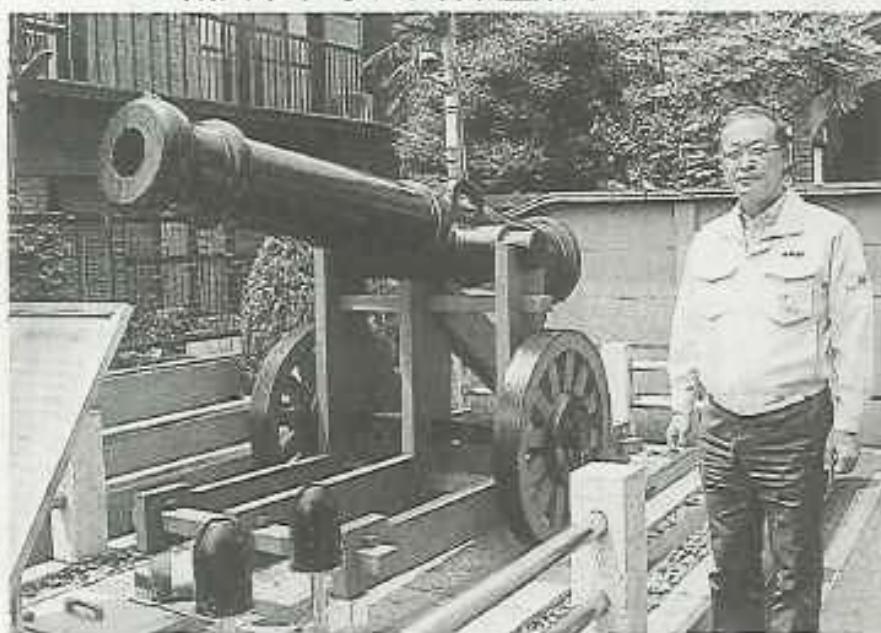


川口市本町1の増幸産業創業家の増田安次郎氏が、幕末の1852(嘉永5)年に弘前藩の依頼で大型大砲(砲身3・5m、重量3t、口径15cm)を初めて生産してから今年で160年目を迎えた。同社の入り口前には、この大型大砲の複製品が飾られ、脈々と引き継がれてきた「進取の精神」を伝えている。

鎌物業から産業機械メーカーに看板を替えたが、鎌物産業の近代化に大きく貢献した“DNA”は今も健在だ。

【鶴沢哲雄】



幕末の大型大砲生産から160年 チャレンジ精神 脈々と

160年前に製造された大型大砲の実物は、パリの軍事博物館にある。9代目社長の増田幸也さん(55)は2年前に博物館を訪れ、「先祖が心血を注いだ大砲に出会い、感激した」という。その後、鎌物組合が市内に設置して、いた複製品を引き取り、同社の入り口前に展示した。

大砲の製造が本格化したのは江戸時代後期。イギリスやアメリカなど大国が、幕府などに開国を迫ったことがきっかけだった。江戸幕府や水戸、長州など各藩は諸外国からの攻撃や侵略を防ぐため、専門の業者に大砲の開発や生産を委託し

た。當時、川口では日用品の鍋・釜などを主に製造していたが、こうした時代背景もあり、次第に大砲など武器類の生産量を増やしていく

た。鎌物を均質に仕上げる高度な技術が、組合が市内に設置して、鐵砲や大砲製造に役立つたという。

増幸産業は、初代安次郎が1804(文化元)年に創業。1844(天保15)年に3代安次郎が加納藩(千葉県)から砲身138cm、重量270kg、口径6.5cmの大砲3門の注文を受け、初めて製造した。

その後、優れた技術を持つ同社の名前が全国に広まり、20を超える藩から銃砲や弾丸の注文が殺到した。1

852(嘉永5)年からわずか5年間で大砲213門、砲弾4万1000発を製造。1863(文久3)年には、当時の砲術奉行が「西洋砲に劣らない大砲铸造を成し遂げた」と記した褒美状を増田家に贈り、代々受け継がれている。

同社は1960年代に鎌物業から産業機械メーカーに転身。現在は食品・医薬品などの原材料を粉末にする粉碎機の製造を手がける。「摩擦技術で世界に貢献」をスローガンに「ナノメートル」の単位への挑戦を続ける増田社長は、「未知の分野に挑むチャレンジ精神は我々に受け継がれています」と話しています。